

ところざわ倶楽部 10 周年記念事業 (案)

音楽朗読劇 「ハーメルンの笛吹き男」上演 (古楽器の紹介と演奏)

- 市民大学、ところざわ倶楽部の講師、特別会員として、この10年 深く関わって下さっている笠松泰洋先生の作品(台本、構成、音楽)大人も子どもも楽しめる舞台です。
- 普段あまり聞く事のない古楽器(チェンバロ、ピオラダガンバ、バロックオーボエ、リコーダー、ズルナ)と出会う良い機会になる。
- 小・中学生 20~30名を公募して出演してもらおう。
子どもは、その成長の過程で出会った対象(人、物語、音楽等の文化)を自分の中にとり込みながら成長していく。良い対象と出会い、向き合う中で、感性が豊かになり、思考力が培われ、その人格形成に深く関わっていくと言われております。
小・中学生にとって、プロの朗読者(鶴見辰吾)振付家(広崎うらん)古楽器演奏家の方々と共に舞台に立つという経験は、それぞれの個性を育てる大切なきっかけとなる。
また、その舞台を見る子ども達にとっても、本物の文化を身近で親しみ、楽しむことが出来、その感動は、心の中に内在して、生きる力となるでしょう。
- その親の世代にとっても、子どもと、物語・音楽等の話を共有出来る。
- 私達 年長者が各々出来る範囲で、地域の中で子ども達の成長を支援し、共にある事を喜びとするのは、大切な役割ではないでしょうか。
- 今後、実行委員会を立ち上げ、公演迄の工程表を作成する。

「ハーメルンの笛吹きおとこ」を作って

笠松泰洋

子供の時に聞いて、世界中の人が知っている物語、「ハーメルンの笛吹き男」。子供の頃は思わなかったが、大人になって改めて読むと、音楽家にとってはちょっと気になる物語である。この笛吹き男は、いったいどんな音楽を奏でてネズミを、そして子供たちを連れ去ったのだろうか、と。また、こうして今でも残っているこの話は、全くの架空の話なのか、それとも、実際にあった話なのか、と。

考えてみるとなかなか悲惨な話である。大人たちが、ネズミ退治のお礼を約束しておきながら、それを守らなかったために、街中の子供たちが連れ去られて消えてしまった、という、子供を持つ身には身震いするような話なのだ。おや、こんな話、聞いた事ある、と思った。そう、今年になって、2度も世界にはそんなことが起こっている。ナイジェリアの中学生200人の誘拐、そして、韓国の客船の沈没で多数の高校生。いずれも、残された親達の悲痛な映像が幾度も流れた。そう、まさに、今でもこの世に起こる話なのである。

では、実際に何があったのだろうか。そんな興味に応える本があった。ちくま文庫から出版されている「ハーメルンの笛吹き男～伝説とその世界」という本である。この物語は、実際に存在するハーメルンという街（地図参照！）に今でも資料としても残っている話であり、全くの作り話ではないのだ！そして、それが実際に起こった年も1284年の6月26日に、ハーメルンの街から140人の子供が消えた、というのはほぼ歴史的な事実なのである。そして、その原因に関して、その後、無数と言っていい歴史研究がなされた。この本は、その素晴らしいまとめでもある。ただ、たくさんの説があり、どれも決定的なものではない、というのが結論である。

私としては、音楽の力を扱った物語、としても興味深い。ネズミも、そして子供たちも、笛吹き男は、腕力でもなく、甘い食べ物でもなく、作り話でもなく、音楽の力だけで、まるで催眠術のように自在に操ってしまったのである。どんな音楽なのだろうか。ネズミを集めたけたたましい音とは、ネズミが踊りだす楽しい音楽とは、そして、子供を連れ去る場面の、「聴いたことのない美しい調べ」とは、どんな音楽だったのだろうか。今回は、13世紀になるべく近い楽器を揃えてみた。今のようないくつかの楽器やクラリネットやヴァイオリンはまだない時代なのだから。

楽しいながらも、この、今でも生き続ける物語が持つ、今でも生き続ける教訓を意識する音楽劇ができれば、と思いながら、そして、時空を超えた音楽の力を自分も得たいと思いながら、この音楽劇を書いた。